

#### 4. 感染予防対策からの考察

今回の集団感染において最大の問題は、

『ウイルスを持った人の、レッスンへの参加を事前に止める』

『万一、ウイルスを持った人が参加しても、レッスン時に感染を発生させない』  
ということを目指してきたこれまでの感染対策が、実際には機能しなかった  
ということである。

合唱は感染リスクが大きいことから、今後レッスンを再開することを考えるときには、今回のことを踏まえて、どのような対策が効果を発揮するのか、慎重に検討する必要がある。

- (1) 講師が新潟移動中に受けた情報を、新潟到着後に担当職員に伝えた。講師の抗原検査が陰性だったこともあってレッスンを行うことを判断したが、デルタ株の感染力の高さや危険性についての認識が足りなかった。講師と関わりのあった周囲に陽性者が出た場合に、「感染リスクがあることを想定して事業を停止する」という、リスク管理面からのルールを、事前に明確な形で設定していなかった。
- (2) 東京から講師を迎えるにあたり、2(4)③のように8月7日の新潟入り当日のほか、8月8日にも抗原検査を行い陰性であった。後日、専門家から抗原検査は症状のある場合に行う検査であるという指摘を受け、検査に対する認識を改めたところである。しかし講師は、発熱後の8月10日においても抗原検査で陰性となっており、検査の確実性やその他、抗原検査を招聘判断の一つの根拠とするには問題があった。
- (3) レッスン時は、2(4)②のとおり、市ガイドラインで求められていた感染予防対策はほぼ実施していた。公演時を想定した動きの指導の中で、講師と近づく場面はあったものの時間的には極めて限定的であった。また、レッスン中の水分補給時は会話することなくすみやかに行っていった。しかし、設置していた4台の扇風機は体感室温低下を目的に使用しており、風向等、換気のために有効でなかった。

#### 5. レッスン時の行動からの考察

- (1) 陽性者25名のうち、中高生が21名と多数であったが、これは中高生のレッスンが8月7・8日においてそれぞれ1時間45分～2時間と、他のグループよりも長かったこと、リーダー的立場にあることから講師の指示を直接受ける場面

が他の学年よりも多かったことが一因と考えられる。

- (2) レッスン時の常時マスク着用は指示していたが、マスクの種類については指示していなかった。ウレタンマスク、布マスクの使用を禁止し、飛沫を防ぐ能力が比較的高い不織布マスクに統一すれば、感染がある程度抑えられた可能性がある。
- (3) コロナ禍対応でレッスンはグループごとに時間を区切って行なっていたものの、レッスンを待つ団員が練習室1の前のロビーで滞留していた。担当職員からは幾度か静かに待つよう指導していたが、徹底されていなかった。他の利用者との接点が生まれる可能性がある共通スペースでもあることから、滞留しないように徹底すべきであった。
- (4) 小二～四対象のレッスン時、中高校生が名札を手渡している。また諸連絡も中・高校生を介して手渡しで配布している。これらの行動も接触機会となった可能性がある。

#### 6. レッスン時以外の行動からの考察

集団感染が中高生に集中したのは、5(1)に記した理由が考えられるが、その他3で記したようにレッスン以外で一緒に行動も多く、そのことが感染拡大につながった可能性がある。

#### 7. 感染力の強い変異株への対応についての考察

- (1) 今回の集団感染がデルタ株によって引き起こされたものであるかどうかについて、当館では確たる情報は持っていない。しかし全国・県内においても、ウイルスが従来型からデルタ株に置き換わっている状況から考えると、デルタ株により引き起こされた可能性が高い。
- (2) デルタ株の感染力の高さの情報が一般的になったのは7月に入ってからだが、感染予防策についてはこれまでのガイドラインを徹底する以上の対策を行わなかった。8月6日に「感染力の高いデルタ株は職場や家庭に持ち込まれると同僚や家族に一気に広がるなど、これまでのウイルスとは明らかに異なる驚異的な感染力を持っている」と市からの通知があった矢先の集団感染であったが、レッスン時以外の感染の可能性にも目を向け、より積極的な感染予防策を取ることが必要であった。